

アテネ僭主政とローマ後期王政(その3) : セルウィウス・トゥリウス王の出自・即位・王権の性格

著者	平田 隆一
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	4
ページ	1-16
発行年	1996-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34437

アテネ僭主政とローマ後期王政（その3）

— セルウィウス・トゥリウス王の出自・即位・王権の性格 —

平 田 隆 一

標記の主題に関し私はすでに2編の論稿⁽¹⁾において、ローマ後期王政最初の王タルクイニウス・プリスクスの王政まで考察を進めた。これを受けて本稿および次稿⁽²⁾では、プリスクス王の死後直ちに王位を継承したと伝えられるセルウィウス・トゥリウスの王政をめぐる諸問題を取り上げる。本稿ではセルウィウスの出自とその即位に至るまでの経緯について論じ、その王権の性格を明らかにする。本問題に関する史料として、A) 主としてキケロ (*de re publica*)、リウィウス、ディオニュシオスの伝承⁽³⁾、B) クラウディウス帝が西暦48年にルグドゥヌム（リヨン）で行なった演説を書き刻んだ碑文、C) セルウィウスがマスタルナと同一視される限り、ヴルチの「フランソワの墓」の壁に前4世紀後半⁽⁴⁾に描かれた図像がある。これらの史料の記述ないし描写には互いに食い違う点が多々見られ、とりわけセルウィウスの出自について、これをラテン系と伝えるローマ側の史料（A）とエトルスキ系とみなすエトルスキ側の史料（B, C）が対立しており、しかもこの出自問題はセルウィウスの王権の性格を規定する重要なポイントとなるのである。私はこれまで本問題に関する主要な四つの学説に対して大雑把な批判を行なった⁽⁵⁾が、各種史料（A, B, C）を併せて入念に検討することはなかった。以下で諸説を批判しつつ、これらの全史料を総合的に点検して、できるだけ整合的な解釈を試みようと思う。

最初に文献史料、碑文史料、壁画史料の順にその内容を挙示する。

A 文献史料 — 便宜上3項目に分け、作家ごとにその記事の要点を列記する。

1 セルウィウス・トゥリウスの出生および経歴。

a キケロ (*r.p.*, II 37) : セルウィウスはタルクイニー出身の女奴隷とタルクイニウス・プリスクス王の被護民との間にできた子で、奴隷として育てられ王の食卓で給仕を務めたが、幼少のころから優れた才能を発揮した。タルクイニウスは自分の子供たちがまだ幼かったので、セルウィウスを寵愛し、そのためセルウィウスは世間では王子と見なされた。王はかつて自分が勉強した全ての事柄について彼を極めて熱心に教育した。

b リウィウス (I 39) : コルニクルム（ラティウムの都市）が占領され、その都市の首長であったセルウィウス・トゥリウスが殺された時、妊娠していた彼の妻はローマの王妃（タナクイル）の計らいで奴隷化を免れ、タルクイニウス・プリスクスの家で出産した。その子がセルウィウスであ

り、彼は母親の不運のため女奴隷の子と信じられたのである。子供のころ彼は就眠中に頭が炎に包まれた。王妃はその子が独りで目覚めるまで水をかけることを禁じ、眠りが覚めると炎も消えた。タナクイルは夫に、この子は将来王室の守りとなるであろうから自分たちが養育しようと進言した。その日からセルウィウスは王の子供として教育を受け、やがて王者の素質を現し、王はこの若者を娘婿にした。

c デイオニュシオス (IV 1~3) : コルニクルムがローマに占領された時、その王家出身の男トゥリウスが殺され、その妻オクリシアは捕虜としてタルクイニウスの妻の奴隷となり、トゥリウスの子を生んだ。オクリシアは後に解放されたが、その子供は彼女が奴隷の時に生まれたので、**Servius** 即ち「奴隷の (子)」と呼ばれた。セルウィウスは幼いころ頭が炎に包まれた。(この奇跡のその後の経過について、デイオニュシオスはリウィウスとほぼ同じ趣旨のことを詳述する。) 別伝によれば王宮の竈の火の上に男の恥部が現れたので、タナクイルはオクリシア一人をその部屋に入れ、神々の一人と交わせ、こうしてセルウィウスが生まれた。その後彼はローマ市民に高く評価され、騎兵や歩兵を率いて武勲をたてた。王は彼を養子に迎えて王女と結婚させ、公私の業務を任せた。

2 タルクイニウス・プリスクスの暗殺とセルウィウスの即位。

a キケロ (*r.p.*, II 38) : タルクイニウスはアンクス・マルキウスの子供たちが仕組んだ陰謀により殺された。タルクイニウスは負傷のため病気だが、まだ生きているという誤った噂が広まっていたので、セルウィウスは王の衣装をまとして裁判を行い、自費で債務者を解放し、タルクイニウスの命令で裁判を行なっていると人々に信じこませた。

b リウィウス (I 40~42) : タルクイニウスはアンクス・マルキウス王の二人の子供が差し向けた刺客に王宮で殺された。タナクイルは王位に就くようセルウィウスを説得した、そして集まってきた民衆に、王は軽傷だ、じき快癒する見込みだ、彼らがセルウィウスの言うことを聴くよう命じた、と告げた。セルウィウスは王の衣装をまとしてリクトルを率いて王座に座り、王に相談しているふりをしながら裁判等を行なった。こうして彼はタルクイニウスの死後その死を隠し、王の代理を務めているように見せかけ、自分の地歩を固めていった。王の死が明らかにされた後、セルウィウスは強力な護衛に囲まれて統治した。

c デイオニュシオス (III 73 ; IV 4~5, 8) : タルクイニウスがマルキウスの子供たちの陰謀で死ぬと、タナクイルは王宮の門を閉ざし番兵を配備して人々の出入りを禁じ、セルウィウスにローマ王になるように説得した。翌日彼女は、集まってきた民衆の前に陰謀者を連行し、王は一命をとりとめたが快癒するまでセルウィウスを公私全般の業務の後見人に任命したと告げて、彼を民衆に推挙した。セルウィウスは強力な手勢に囲まれリクトルを率いて広場に赴き、裁判への出頭命令に従わなかったマルキウス氏の永久追放を宣言し、その財産を没収し、タルクイニウスが保持していた支配権を確保した。その後セルウィウスは、タルクイニウスがつい最近死んだかのように盛大な葬儀を行なった。

3 セルウィウスによる王権の正当化。

a キケロ (*r.p.*, II 37, 38)：セルウィウスは市民たちの命を受けずにその意向と同意によって統治を始め、パトレスとは関わりを持たず、自分のことについて市民団に諮問して統治を命じられ、自分の命令権についてクリア法を制定した。

b リウィウス (I 41, 6 ; 46, 1)：セルウィウスは最初市民団の命によらずパトレスの意向によって統治したが、その後平民の好意を得るため、敵から占領した土地を個別的に分与した。その後彼は市民団に彼の統治を欲し命じるかどうかを敢えて諮り、その同意により王と宣言された。

c デイオニシオス (IV 8, 3 ; 10ff. ; cf. 40, 1)：セルウィウスは貧民の支持により支配権を保持しようとして民会を召集し、債務者の負債を返済し土地を分与するという王令を發布した。これに対してパトリキーが反発し、彼の即位の非合法性を批判した。しかし彼は市民団の賛同を得て、全クリアの投票により即位を認定された。彼は元老院にこの認定を受諾するよう勧告し、市民団の議決に元老院の批准は要らないと考えた。

B 碑文史料 (*ILS* 212, 16ff.) — 内容に即して便宜上4項目に分けて列記する。

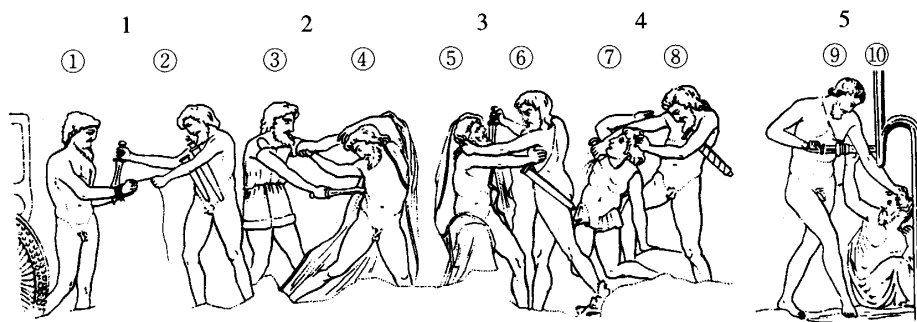
1 タルクイニウス・プリスクスとその息子または孫の間に入るセルウィウス・トゥリウスは、我々（ローマ側の史料）に従えば、女捕虜オクレシアから生まれたが、

2 エトルスキ人（の史料）に従えば、かつてカエレス・ウィウエンナの最も忠実な部将であり、カエレスとあらゆる苦楽を共にした仲間であった。

3 彼は転変する運命に追い立てられ、カエレスの軍隊の残り全員とともにエトルリアを立ち去ったのち、（ローマの）カエリウス丘 (*mons Caelius*) を占領し、自分の司令官カエレス (*Caeles*) に因んでこの丘をそのように名付けた。

4 そして彼は名前を変えて — というのはエトルスキ語で彼の名はマスタルナ (*Mastarna*) であったから — 、前に述べた通り（セルウィウス・トゥリウスと）呼ばれ、最も国益にそうように王位を確保した。

C 壁画史料 — それぞれ名前を付記された二人一組（1～5）の人物（①～⑩）の挙動（下図）について、左から右に描かれた順に組ごとに要点のみを解説する。



(番号を除き *The Cambridge Ancient History*², VII, 2, 1989, p.95から転載)

1 裸の *caile vipinas* (①) が紐で縛られた両手を前に差し出し、裸の *macstrna* (②) がその紐を剣で断ち切ろうとしている。後者はもう一本の剣を首からつるしている。

2 トウニカを着た *larθ ulθes* (③) が、ガウンを翻して逃げる *laris papaθnas velznax* (④) の右脇腹に剣を突き刺している。

3 激しく抵抗しガウンがずり落ちかかっている *pesna arcmsnas sveamax* (⑤) の左肩に、裸の *rasce* (⑥) が剣を突き刺している。

4 革の甲冑を着て逃げる *venθi calxxsx plsaxs* (⑦) の髪の毛を背後からつかんで、裸の *aule vipinas* (⑧) がその右胸に剣を深く突き刺している。

5 立ちはだかった裸の *marce camitlnas* (⑨) が、屈み込んでガウンがずり落ちかかっている *cneve tarxunies rumax* (⑩) に剣を突き付けている。

史料は以上の通りである。以下でそれぞれの信憑性ならびに相互関連性を検討する。

セルウィウスが実在の人物であったことは、諸々の点から疑いない⁽⁶⁾。その出自について現存する主要な文献史料の中で最も古いキケロ (A1a) は、セルウィウスが女奴隷とタルクイニウスの被護民との子供であったと述べているだけである。従って彼が『国家論』を執筆した前50年代⁽⁷⁾にはこの伝承が一般に信じられていて、セルウィウスがコルニクルムの名門の出であったという説は、仮に流布していたにせよ疑問視されていたと考量される。何故なら第一に、もしその名門説が人口に膾炙していたとすれば、セルウィウスを理想的な王として賞揚してやまなかったキケロ⁽⁸⁾は、むしろこの伝承の方を喜んで採択したであろうし、またその後もプルタルコス (*Fort. Rom.*, 10) がセルウィウスを被護民の子と見なしたり、フェストゥス (182L; cf. *Zon.*, VII 9, 1) が、もしもセルウィウスの母が捕虜で奴隷でなかったとすれば、スプリウス・トゥリウスの妾であった、と書き残したりすることはなかったであろうから。これに反しアウグストゥス時代のリウィウスとディオニュシオス (A1b, c) は、ともにセルウィウスを名門の出と見なしている。そのさいリウィウスはセルウィウスの優れた素質を強調しつつ、その母親は高貴な生まれの故に奴隷化を免れたと主張しており、当該記事には、この王を微賤の身から救い上げその名誉を護ろうとしたかのローマ史家の愛国的意図が、図らずも露呈している。これに対してディオニュシオスは、オクリシアは最初タルクイニウスの妻の女奴隷であったと明記しており、この記述は、セルウィウスは女奴隷の子だったという認識でキケロと通底している。

以上の考察から、これら3人の著作家のうちでキケロの所伝が最も古くからの伝承を保存していた公算が極めて大きいと判定される。では彼の記事は全て歴史的事実を報じているのだろうか。ここで問題となるのは、セルウィウスの母は本当に女奴隷 (*serva*) であったのかという点である。というのはセルウィウスが奴隷の子と同定されたのは、ディオニュシオスが言明し (A1c)、リウィウスも暗示するように (I 40, 3: *servus serva natus*)、*Servius* という人名が *servus* 「奴隷」から派生

したと解釈されたためだと考えられるから。しかも *servus* がセルウィウス時代から「奴隷」を意味したのかどうかは確かでなく様々の説が提唱されており、語源的にはむしろ別な語釈の方が適切だと思われる⁽⁹⁾。仮に上述の“奴隷”語源説が正しいとしても、それは直ちにセルウィウスの奴隷出身説を立証する証拠とはならず、次の点からむしろ疑わしい。即ち奴隷は一般に単一名で呼ばれるが、*Servius Tullius* という名前は *praenomen*（個人の名前）と *nomen gentile*（氏族名）から成り、このような2部構成の人名定型は市民身分を表し、エトルリアではすでに前7世紀中に確立していた（『国制』p.13, 15, n.11）。従って前6世紀のエトルスキ系のローマ王宮においても、奴隷がこのような2部構成の名前を持っていたとは信じ難いのである。

注目すべきことに、キケロはセルウィウスの父を“*cliens*”「被護民」と伝えている。キケロのこの所伝は、たとえセルウィウスの父が厳密な意味での“*cliens*”ではなかったとしても、これと同じような従属的身分に属し、さらに本人も従属的地位にあった（「奴隷として（*famulorum in numero*）育てられた」）という無視できない伝承が流布していたことを示唆する。さもないとキケロは、セルウィウスの母親を奴隷と記すだけで事足りたはずであり、その父親までも被護民だったことさら明記する必要はなかったであろう。キケロにしてみれば、彼の理想とする王の賤しい素性はできれば隠したかったであろう。

以上の考証から次のような結論が導き出せる、——即ち、セルウィウスの父がラティウムの名門の出身で母が戦争捕虜＝女奴隷であったという伝承は、後に捏造された話であり⁽¹⁰⁾、この伝説が広く受容される前には、セルウィウスが従属民の出身であってタルクイニウス・プリスクスの従者を務めたという伝承の方がより流布していた⁽¹¹⁾、と。

キケロの記事で次に問題となるのは、プリスクスがセルウィウスを寵愛し熱心に教育を施し重用し、そのため人々が後者を王子と見なしたという件である。他人の子供の才覚を見抜いて教育・重用するということは、実際にありそうなことである。しかしプリスクスには自分の子供たちがおり、またセルウィウスがれっきとした固有の氏族名を持っているのに、人々が後者を王子と見なしたというのは奇妙であり、この箇所の信憑性が疑われる。ここでキケロは、セルウィウスには即位以前から民衆の支持があったことを示唆することによって、その即位の非合法性（後述）を多少とも緩和しようとした、と推定される。

これまでの論考に大過がなければ、キケロの記事（A1a）からより古い伝承を保存している部分として次の点が抽出されよう、即ち、セルウィウスはタルクイニウス・プリスクスの従者であったが、その才覚を認められてこの王の庇護の下に教育され重用された。換言すれば、タルクイニウスとセルウィウスとは極めて親密な主従関係で結ばれていたという点が。ではこの主従関係は、はたして本当に歴史的事実であったのだろうか。

実はこれと酷似した極めて親密な主従関係が、史料B2、B3にも疑問の余地なく記述されているのである。即ちマスタルナ＝セルウィウスは“*dux*”「指導者、司令官」であるカエレス・ウィウェ

ンナの *sodalis fedelissimus*「最も忠実な部将」であり、常に行動をとともにし、自分が占領したカエリウス丘にこの *dux* の名前を付けたというのである。文献史料 (Var., *l. l.*, V 46 ; Fest., 38L, 486L ; Tac., *ann.*, IV 65 ; Dion. Hal., II 36, 2) もその丘の名祖として同じ *Caeles Vibenna* の名を挙げている。問題の “*sodalis*” は前500年ころに編年される、サトリクム出土の碑文中にも *suodales* という形で実証され⁽¹²⁾、この碑文により *dux* と *sodalis* の関係⁽¹³⁾ が前6世紀に実際に存在していたことが明証される。その上ここにラテン語名で登場する *Caeles Vivenna* (*Vibenna*) は、C①にエトルスキ語名で記された *caile vipinas* と同一人物であり、また彼の兄弟と見なされる C⑧の *aule vipinas* は、ウェーイ出土の前6世紀の壺に *avile vipiennas* (TLE² 35) という形で記されており、これらの証拠によって *Caeles Vivenna* の実在性は疑いえない。従ってまたマスタルナが実在したことも確実視され⁽¹⁴⁾、かくしてカエレス・ウィウエンナとマスタルナの主従関係を報ずるクラウディウス帝の記事には信憑性があると評定される⁽¹⁵⁾。

他方また、史料Cにも同じような親密な主従関係が看取される。壁画に描かれた人物の名前は、二つの例外、即ち *macstrna* (②) と *rasce* (⑥) とを除いて、全て *praenomen* と *nomen gentile* から成り、4人の名前にはさらに「○○人」(・-χ) という形で出身地名が併記されている：*velzna-χ* (④) = 「Volsinii 人」、*sveama-χ* (⑤) = 「Suana 人」、*plsa-χ* (⑦) = 「Plsa (= ?) 人」⁽¹⁶⁾、*ruma-χ* (⑩) = 「ローマ人」。エトルリアでは公式の人名表記において単一名は正規の市民の名前ではなく、当該人物の何らかの従属的な地位を表示するが、まさに *macstrna* (= *Mastarna*) の場合がそうである。しかも彼は捕らわれたカイレ・ウィピナス (①) = カエレス・ウィウエンナ (B2) を救出すべく、これに手渡す剣を首からつるして馳せ参じているのであり、このC1の場面に、B2, B3で叙述された *dux* と *sodalis* の親密な主従関係の具体的な一面が描出されていると断定してよからう。時代的にも地理的にも全然かけ離れた全く別個の二つの史料 (B, C) が、このように本質的に一致している以上、カイレ・ウィピナスとマスタルナとの極めて親密な主従関係、従ってまたそれに基づく彼らの軍事行動 (戦闘、救出) を歴史的事実と認定するのが至当である。

これまでの検討から次のことが明らかになった、——キケロの記事から抽出されたより古い伝承、即ちプリスクスとセルウィウスの間の極めて親密な主従関係に関する伝承は、カイレ・ウィピナスとマスタルナの間のそれに関するエトルスキ側の伝承と基本的に一致し、双方の所伝の史実性はローマの伝承については論証されないが、エトルスキのそれについては実証されている、従ってエトルスキの所伝は信頼に値するということが。この結論が的確であるならば、キケロの記事もそのエトルスキの史料に遡源する⁽¹⁷⁾ 蓋然性が大きく、他方クラウディウスがエトルスキの史料に依拠してセルウィウスとマスタルナを同一視している以上、この両者が同一人物であった⁽¹⁸⁾ ことは確定的であろう。以上の論議を踏まえて、次のような仮説を提唱しても無謀ではあるまい。即ちマスタルナがセルウィウス王としてローマを支配した結果、エトルリアにおける彼の経歴・活動に関する情報がローマにもたらされ、カイレ・ウィピナスとマスタルナの親密な主従関係はプリスクスとセル

ウィウスに関係に転移されて引き写され、そしてこの転用された主従関係が、時とともに神話的伝説等で潤色されてローマ側の伝承の中に組み入れられた⁽¹⁹⁾、と。

次にセルウィウスの即位の事情について、文献史料が史実を伝えているのかどうかは、碑文および壁画史料を併せて総合的に検討しなければならない。そのさい壁画史料については、各人物の挙動、人名の構成や定型、着衣の状況や髭の有無等を根拠にいろいろな解釈が行われているので、まず主にその挙動と人名によって関連する問題を究明しよう。

壁画の中で殺戮された人物には出身地名が併記されているが、殺害あるいは救出している人物にはかかる記載はない。しかしこのことを論拠として⁽²⁰⁾ これらの勝利者は全員「フランソワの墓」の所在地ヴルチの出身だったと論断する⁽²¹⁾ のは早計である。そうではなく、彼らは必ずしも特定の都市国家に所属せず、戦闘のため雇われた職業的戦士、*condottiere*「傭兵隊長」⁽²²⁾ であったと見なした方が、次の二つの理由から適切である。第1に、*caile vipinas* (①) の名前はヴルチの他にウォルシニーでも *aule vipinas* とともに実証され、またカエレス・ウィベンナはロムルスまたはタルクイニウス・プリスクスの時代にローマにやってきたと伝えられ、一方その兄弟アウレ・ウィピナス (⑧) の名はヴルチ、ウォルシニーの他に前6世紀のウェーでも知られている (TLE² 35)。この二人以外に地名を併記されていない人物 (③⑥⑨) のうち、*macstrna* (③) と *rasce* (⑥) は単一名であり、従って彼らは、仮にヴルチの出身であったとしても、決してこの都市国家の正規の市民ではなかった⁽²³⁾。第2に、彼ら全員に何の称号も付記されていないが、これは彼らが少なくともヴルチの公式の官職に就いて軍事行動を展開したのではないことを示唆するであろう⁽²⁴⁾。仮に *macstrna* が *magister* に由来し「将軍」を意味したとしても（これはすぐ後で反駁する）、それは本来の称号ではなく「将軍」というあだ名にすぎない。

通説⁽²⁵⁾ では、エトルスキ語 *macstrevc* がラテン語 *magister* を転写した借用語であることを論拠として、*Mastarna* = *macstrna* も *magister* から派生したと想定し、ここからマスタルナの軍事的役割を推定するが、この通説は排斥される。なるほど *macstrev-c*（語尾-c = ラテン語-que「及び」）が *magister* の借用語であることは、エトルスキ語銘文 (TLE² 195) : *eisnev c eprθnev c macstrev c* において、問題の単語が *eisnev-c*「神官」ならびに *eprθnev-c*「都市長官」と併記されていることから確実視される (『国制』p.241ff.)。しかし *Mastarna* = *macstrna* は、純然たるエトルスキ語人名である⁽²⁶⁾ と把握しても何の不都合もなく、-naによる個人のコグノーメン⁽²⁷⁾ として説明できるが、逆にそれを *magister* の借用語と想定した場合、次のような難点が生ずる。第1に“*Mastarna*”は語幹 *mastar-* に、所属を表す接尾辞 -na が接合されたものであり、それは「*magister* に属する (者)」という意味になり、*Mastarna* 本人ではなくカイレ・ウィピナスの称号ということになる⁽²⁸⁾。第2に王政期の *magister* は、共和政期における非常時の官職 *dictator* が古くは *magister populi* と称されたことから類推された役職であって、その限り常任の役職ではなく、王が不在または病気の時に臨時に設置されたと想定しなければならないが、かかるローマの臨時官職名がエトルスキ語人名に転用さ

れたと想像するのは容易でない。他方また *magister* は王政期には常任の官職だったという前提の下に、“*Mastarna*” が “*magister*” から派生したと主張する論者は、エトルスキ側の史料（B4）によってマスタルナをセルウィウスと同一視しながら、セルウィウスをコルニクルム出身の女奴隷の子と見なしつつ、プリスクスの下での彼の軍事的活動を報ずるディオニュシオスの史料（A1c）を併用していることになる。つまり彼らはその信憑性を否認した史料を援用するという方法論的な過ちを犯しているのである。しかもかかる軍事的活動についてはディオニュシオスだけが言及し、キケロもリウィウスも触れていないので、それはこのギリシア人歴史家（ないしその史料）の創作であった公算が大きく⁽²⁹⁾、典拠としての価値は疑わしい。

さてタルクイニウスの殺害は、ローマ側の史料 A2 とエトルスキ側の史料 C5 に現れる。ところが殺されたのは、A2 では *Lucius Tarquinius (Priscus)* だったのに対し、C5 では *cneve tarχunies* (= *Gnaeus Tarquinius*) であった。つまり被害者は二人とも同じタルクイニウス氏に属するが、プラエノーメンを異にしており、全くの別人であった⁽³⁰⁾。この根本的な違いを度外視して両者を同一人物と見なす試み⁽³¹⁾は、牽強附会の感を免れない。先に推定した通り、タルクイニウス・プリスクスとセルウィウスとの親密な主従関係は、カイレ・ウィピナスとマスタルナとの主従関係を引き写したものであるが、カイレ・ウィピナス=カエレス・ウィウエンナの殺害については、エトルスキ側の史料（B, C）は何ら言及も描写もしていない。それ故この点に関してタルクイニウス・プリスクスをカイレ・ウィピナスと読みかえることは許されない。換言すれば、プリスクスの暗殺をマスタルナに関する前述のエトルスキ側の情報からの転用、従ってエトルリアで発生した事件と解釈するわけにはいかないのである。プリスクスがローマ都市の経済的・領土的発展とともに王権を強化しつつあっただけに、（アンクス・マルキウスの子が中心になった（A2a, b, c）かどうかは不明でできないが）、反対勢力が結集してプリスクスを急襲・暗殺したとしても不思議ではない。確かにリウィウスやディオニュシオスが物語る詳細は後に粉飾されたものである⁽³²⁾が、しかしその伝承の核心は実在した現職の王の暗殺という点で一致しており、その点では真実を報道していると考定できる。従ってタルクイニウス・プリスクスの殺害は、他ならぬローマの王宮内で実際に起こった出来事であると論定できよう。

そのさいマスタルナ=セルウィウスは、カイレ・ウィピナスの部下であってタルクイニウスとは無関係だったので、ローマ王宮にいたはずはなく、この事件には全然関与しなかった、と理解しなければならない。もし伝承通り彼がタルクイニウスの優秀な片腕であって、余人をもっては代え難いその後継者と目されていたとすれば、王位を狙う陰謀の首謀者たちは何故強力なライヴァルであるセルウィウスではなく、すでに老齢を迎えていたはずのプリスクスを標的としたのか、という疑問が生じる。この点についてリウィウス（I 40, 4）は、次の2つの理由を挙げてかかる疑問を解消しようと試みている。即ち(1)もし王が生き残ったとすれば、私人よりも王の方が殺人に対し厳しく復讐したであろう、(2)セルウィウスが殺されれば、王は誰か他の者を娘婿として選びこれを

王の後継者にするだろうと思われた、と。しかし第1の理由は、過去の事実に対する仮定に対し推測できる帰結の一つを提示したにすぎず、全く逆の帰結も成り立ちうるのである。また王による後継者の任命を前提とする第2の理由は、当時のローマでは法制的な観点から妥当性を欠き、このことはリウィウス自身も知悉していたはずである。つまりこれら2つの理由は、セルウィウスではなくプリスクスが殺された理由としては不十分かつ不自然であって、リウィウスの無理なこじつけと見なさざるをえない。かかるこじつけを余儀なくされたのは、一方ではプリスクスの暗殺という厳然たる事実がローマ側の史料で伝えられており、他方ではウィピナスとマスタルナ＝セルウィウスの主従関係に関するエトルスキ側の情報が、ローマ側の史料の中にすでに識別できぬほど巧妙に組み込まれてしまっていたからだと推定される。

以上のように、プリスクスの殺害がマスタルナ＝セルウィウスとは関係なくローマ王宮内で発生した事件だったとすれば、プリスクスが暗殺された直後にタナクイルが王の代役を立てた措置も、ローマ王宮内で起こった歴史的事実を踏まえていたと把握されよう⁽³³⁾。というのは第1に、この機敏な措置は断絶の危機に晒された王位を保全するには最善の方策であったと考えられる（ただしその他の措置の具体的な詳細は、恐らく想像の産物である）。第2に、エトルスキ語女性プラエノーメン *θanaxvil* を転写したラテン語形は普通 *Tanaquilla* であるが、リウィウスは殆ど原形のまま伝えており（“*Tanaquil*”）⁽³⁴⁾、これによってこの女性の実在性は確実視される。そしてタナクイルのキングメーカーとしての役割⁽³⁵⁾は、つとにプリスクスがルクモという名前でローマにやって来た時に、彼女が前兆を解釈して彼の将来の即位を予言したことからも看取される。

このようにプリスクスの暗殺とその直後のタナクイルの措置がローマ王宮内の出来事であり、しかも事件当時マスタルナ＝セルウィウスがローマ王宮とは無関係だった限り、その暗殺後にその王妃の機転でローマの“王座”に就いたのは、論理的に言ってセルウィウスではありえず、彼女の身内、即ちタルクイニウス氏の一員であったと把握される。むろん王妃の背後には、プリスクスの王政を支持してきてタルクイニウス氏の王位の存続を切望する一派がいたに相違ない。この時ローマの統治者の地位に就いたその人物として、我々に名前が知られていないタルクイニウス某を想定する⁽³⁶⁾より、それをC ⑩の *cneve tarχunies* と同定した方が、以下で論及する歴史的状況にヨリ適合すると思われる。

クネウェ・タルクニエスがローマ王として統治した⁽³⁷⁾ことを伝える史料は皆無である。それは彼の統治期間がかなり短くて人々の記憶に留められなかったためというより、王家にとっては適切・機敏だったタナクイルの措置が、当時のローマの国制に違反する行為だったためだと考えられる。プリスクスの場合、王の選定は中間王によりクリア民会で行われた（「Ⅱ」p. 45ff.）が、この通常の手続きを頭から無視して、しかも世襲王政を目指したクネウェの強引な即位は、非合法であっただけではなく、パトレスのアウスピキア権（「Ⅱ」p. 47, 50f., 58f.）を蹂躪する行為でもあり、さなきだに王権の強化を危惧していた彼らの反発を買ったに違いない。それ故に彼は正当なローマ王

とは認定されず、ローマの正史にその名は記録されなかったのであろう。もしスペルブスがプリスクスの孫であった（B1）なら、クネウエはラテン人・エトルスキ人と戦ったと伝えられるプリスクスの息子（Macrob., 1, 6, 8; Plut., *Q. R.*, 101）と同定されよう⁽³⁸⁾。ともあれ彼はタルクイニウス氏の一員として、プリスクスが残した遺産、即ち彼を支援する一派と相当数のクリエンテスとを相続し、彼らを私兵として動員することによって“王位”を篡奪できたと察せられる。

以上の考察が的外れでなければ、プリスクスの横死後ローマは新しい“王”を擁立する“王党派”と、パトレスを中心とする反タルクイニウス派とに分裂し、国政の主導権をめぐって両者の間に対立が生じたと思われる。プリスクス時代には“インペリウム”を保持する王とアウスピキア権を保有するパトレスとが二重構造を成していた（「II」p.59, 61）が、今やこれは和解し難い公然たる二元支配へと変貌した。かかる内紛状態が何年続いたかは不明である⁽³⁹⁾が、ラティウム最大の都市国家がこのように政治的混乱に陥ると、これに重大な政治的・経済的利害関係を有する南エトルリアの諸都市国家は、それに対して一斉に干渉や制圧を試みたり、あるいは逆にこのような動きを阻止せんとしたに違いない。各国の首長が自ら、もしくは“dux”即ち *condottiere*「傭兵隊長」が、軍隊を率いて互いに衝突したであろう。「フランソワの墓」の壁画は、まさにこの動乱の時期における攻防の場面を描いたものと解釈される。カイレ・ウィピナスとマスタルナも様々な戦闘に介入し（B2, B3）、その過程で前者が捕虜となり、後者がこれを救出する一幕もあった（C1）。クネウエ・タルクニエスもこの戦乱に巻き込まれたが、対立するパトレス派からは援助を期待すべくもなかった。従って彼は自分の私兵を率い、またエトルスキ都市国家からの個人的援軍を頼みとして争乱の渦中に身を投じ⁽⁴⁰⁾、結局は敗れて彼自身マルケ・カミトルナスに刺殺されてしまった（C5）。クネウエ・タルクニエス“王”の戦死は、ローマにおけるタルクイニウス氏の支配を中断させ、その一派の勢力を殺ぐ結果となった。

マスタルナの率いる戦士団がローマに進攻したのは（B3）、まさにこの時であったと考えられる。このエトルスキ軍の襲撃に直面して、クネウエ“王”の死に意気消沈した“王党派”はもはや抵抗する気力を喪失しており、パトレス派のみが急遽軍隊を編成して迎撃したであろう。しかしまだ重装歩兵の密集隊制を導入せず、戦車ないし騎兵を中心とする戦法に頼っていた彼らの軍隊（「II」p.55f.）は、起伏に富んだローマ市付近の戦闘においてその機動力を生かせず、百戦錬磨のエトルスキの職業的戦士団に敗れ、かくしてマスタルナはカエリウスの丘を難なく占領できたのである。この丘は以前には *mons Quequetulanus* と呼ばれていたと言われ（Tac., *ann.*, IV 65）、伝承はそれがカエレス・ウィベンナに因んでカエリウスの丘と命名されたという点で一致し、クラウディウスはその命名をマスタルナに帰している。この地名の由来に関する伝承を無下に斥ける⁽⁴¹⁾わけにはいかないであろう。何故ならカイレ・ウィピナスとマスタルナの主従関係がタルクイニウスとセルウィウスのそれに転用された結果、その後のローマの歴史伝承においてマスタルナはセルウィウスの人物像の中にすっかり吸収されてその存在が忘れ去られ、問題の丘の名祖としてカエレス・

ウィベンナ＝カイレ・ウィピナスの存在だけが、彼のローマ来訪の時期を特定せずに語り継がれたと推定されるから。しかしウィベンナが何時のことであれ一時的にしかローマに滞在しなかったのなら、その丘に付けられた彼の名前は決して後々まで残らなかったであろう。マスタルナとセルウィウスが同一人物であったからこそ、彼のローマ王としての威令によってその名が後世まで伝達されたと考えられるのである。

マスタルナ＝セルウィウスがその軍事力をバックにして自らローマ王に就任したことは、ローマ側の史料 A2b, c の記述からも読みとれる。即ち彼は「強力な衛兵に囲まれて *praesidio firmo munitus*」(Liv., I 41, 6)、あるいは「身邊に強力な手勢を率いて *ισχυρὰν χεῖρα περὶ αὐτὸν ἔχων*」(Dion. Hal., IV 5, 3) 統治を始めたと伝えられるが、以前の王たちが——伝説的なロムルス (Liv., I 15, 8) は別として——かかる衛兵を保有していたという記録はなく、突如としてこれが出現した以上、それはセルウィウス自身が擁していた軍隊の一部だったと把握するしかない。もしセルウィウスがローマ側の伝承通り、プリスクスの王宮で養育され市民たちにも高く評価されていたのなら、かつてプリスクス自身がそうしたように、自ら立候補して合法的に即位する途が開けていた(「II」p. 52f.) ので、王権を掌握するために衛兵を動員する必要はなかったはずである。

要するにマスタルナはエトルリア出身の征服王だった。従って彼は当初、ローマの正規の即位手続きに則りクリア民会で選定されたのではなかった。この事実は愛国的ローマ人といえども隠蔽できなかった。この点に関しキケロ (*r. p.*, II 38) は *regnare coepisset non iussu, sed voluntate atque consensu civium* と、リウィウス (I 41, 6) は *primus iniussu voluntate patrum regnavit* と述べ、両者ともセルウィウスが市民団の「命によらず」統治を始めたことを認める点で本質的に一致する。これは当時のローマ国制に違反する行為であり⁽⁴²⁾、その点ディオニュシオス (IV 8,2) は τῆς παρανόμου ἀρχῆς 「違法な支配」と明記している (Cf. IV 10, 5: τὴν παρανόμον αὐτοῦ δυναστείαν 「彼の違法な権力」)。にも拘わらずキケロもリウィウスもそれを報じている以上、それは間違いなく史実と断定してよい。しかし二人の後続の論点はそれぞれが抱いた憶測にすぎない。というのは彼らにとって肝要だったのは、セルウィウスの当面の非合法的な統治を弁明し、できるだけ正当化することであったから。キケロはセルウィウスがパトレスとは関わりを持たなかったと信じた(これはパトリキーの反発を伝えるディオニュシオスの記事 (IV 10, 4) と照応する) ので、「市民たちの意向と合意によって」統治したと想定したのであろう。他方リウィウスは、単なる「市民たちの意向」は法的に無効であると考え、彼がトゥルス・ホステリウスとアンクス・マルキウスの即位手続きと見なした *patres auctores (facti)* 「パトレスが承認者(だった)」(「II」p.45f.)、を想起しつつ、セルウィウスの場合は *voluntate patrum* 「パトレスの意向によって」統治したと想像したのであろう。

だがマスタルナは賢明にも、外国出身の征服王というイメージを払拭してその絶対的支配をカムフラージュしようとした。第1に自分の名前をローマふうのセルウィウス・トゥリウスと改め

(B4)⁽⁴³⁾、第2にその独裁権力を合法化したのである(A3)。第2点についてキケロ(ibid.)は *populum de ipse consuluit iussusque regnare legem de imperio suo curiatam tulit* と、リウィウス(I 46, 1)は *ausus est ferre ad populum vellent iubentne se regnare, tantoque consensu.... rex est declaratus* と記している。これらの記事を捏造と見る見解⁽⁴⁴⁾は、彼の権力の合法化が市民軍の動員という点からも不可欠であったことを看過している。肝心なのはその中から真実を探り出すことである。キケロとリウィウスの表現には若干の差異が見られるが、両者の記事の内容は、セルウィウスが「市民団に諮って王としての統治を命じられた」という点で本質的に同じであり、しかも特徴的なことに、二人とも *comitia curiata* には触れていないのである。以上の点からセルウィウスが自ら *populus* を召集したこと、そしてここで *populus* が *comitia curiata* 「クリア民会」ではなく、*comitia calata* を指すことは明白である。後者は王が召集しその意向を下達し了承を得る“召集民会”であり⁽⁴⁵⁾、そこに参集した *populus* は票決する“市民団”ではなく、実態としては、報告を了承する“民衆”であった。とすればそこで彼は額面通り「市民団」に統治を「命じられた」あるいは「王と宣言された」のではなく、召集した民衆に対し自らを王と宣言したと解釈される。そのさうい彼は土地分与や債務の帳消しを実施ないし約束したと伝えられる(A2a ; A3b,c)。平民に有利なこれらの政策は殆ど全て後世の捏造であるという主張⁽⁴⁶⁾は、当時の歴史的状況から判断して実際にありえた事象をも否認するもので、セルウィウスが民衆の支持を必要とした事情を捕捉しそこなっている。私見では、少なくとも征服地分与の政策は史実と見なしうる⁽⁴⁷⁾。かかる施政方針の表明に、民衆は歓呼の声をあげて賛同の意を表明したであろう。

これより先タルクイニウス・プリスクスは、クリア民会で王に選定された後、召集民会においてその即位を報告し了承を得ていたと推考される。何故なら王が市民全体に係わる政策を施行する場合、彼にはクイリテスのみならず非クイリテスの同意と協力も不可欠であり、また前者のみ参加するクリア民会の議決は、全市民を拘束する効力を持たなかったので、クリア民会よりも全市民の参加を原則とする召集民会の方がはるかに重要だったから。そうであるならば、セルウィウスが召集民会において王たることを宣言し民衆が歓呼賛同した限り、これは形式上 *iussu populi* 「市民団の命によって」その王としての統治が承認されたことを意味する。こうして彼は自分の王位を正当なものとして公認させ、その私的な独裁権力を合法的な王権、包括的・絶対的な国家権力＝“インペリウム”として確立し、エトルスキの征服王ではなく正式の“ローマ王”と認定されたのである。

もともとセルウィウスはエトルスキ都市国家の“王”ではなく、カイレ・ウイピナスの残軍の隊長にすぎなかった。この意味で彼は“エトルスキ王”ではなく、エトルスキ系の“ローマ王”であり、それ故また彼が掌握した包括的・絶対的な権力も、本来的にエトルスキの王権ではなく⁽⁴⁸⁾、ローマの歴史的推展の中で確立されたローマの王権と把握しなければならない。また厳密に言えば、彼の権力は「王権 *potestas regia*」であって、共和政最高政務官の *imperium* と同一ではない。しかし両者は包括的・絶対的な権力という点で原理的に同じであり、この意味で共和政最高政務官はロー

マ王の“インペリウム”を引き継いだと言ってもよい。なおキケロは民会での選挙とともに「インペリウムに関するクリア法」の制定を挙げる（Dion. Hal., IV 12, 3も）が、クリアの形骸化を目指したセルウィウスが「クリア法」の制定を取って行なったとは考えられない。ともあれセルウィウスが包括的・絶対的な王権を合法的な国家権力として確立・保持したという事実こそ、制約された王権しか持たなかったプリスクスとは違って、彼がやがて抜本的な国制改革を、パトレスの容喙を受けずに自分の一存で断行できた所以であると考定される。

最後に以上の考察を整理しつつ、セルウィウスのローマ王即位に至るまでの経緯を再構成して本稿の結びとする。—— エトルスキの従属民を父とするマスタルナは、各地を転戦するエトルスキの傭兵隊長カイレ・ウィピナス（＝カエレス・ウィウエンナ）に仕えていたが、ウィピナスの腹心の部将として常に行動を共にした。当時ローマではタルクイニウス・プリスクス王が暗殺され、急遽同じ氏族のクネウェ・タルクニエス（＝グナエウス・タルクイニウス）が非合法的に王座に就き、パトレスを中心とする貴族と対立していた。このローマの内紛を契機にエトルリアでも諸都市国家の間に紛争が生じ、武力衝突が繰り広げられた。かかる衝突の最中にカイレ・ウィピナスは捕虜となり、マスタルナが彼を救出した。クネウェ・タルクニエス“王”もこのエトルリアの争乱に巻き込まれ、結局マルケ・カミトルナスに殺された。この“王”の死後、マスタルナはカイレ・ウィピナスの残軍を率いてローマに進攻し、パトレスの指揮するローマ軍を破ってカエリウス丘を占領し、その軍事力をバックにローマの王位を掌握した。この時点で彼は征服王であった。しかし彼はセルウィウス・トゥリウスと改名して、ローマ「市民団」＝民衆を召集し、彼らの歓呼賛同によってその王位を正当なものとして公認させ、その私的な独裁権力を合法的な王権、包括的・絶対的な国家権力“imperium”として確立した。かくしてセルウィウスは正式のローマ王として、その合法化された独裁的王権によってやがて抜本的な改革を自分の一存で行うことができたのである。

注

- 1) 「アテネ僭主政とローマ後期王政——その崩壊前後における demos と plebs の動向（そのⅠ）——」『国際文化研究』（東北大学国際文化学会）2（1995）、p.1-13；「アテネ僭主政とローマ後期王政（そのⅡ）——タルクイニウス・プリスクスの王政の構造を中心として——」『ヨーロッパ研究』（東北大学大学院国際文化研究科ヨーロッパ文化論講座）創刊号（1996）、p.41-68（以下本文中で「Ⅱ」として引用する）。なお紙幅の制約上、著書・論文の副題はなるべく省略する。
- 2) 「アテネ僭主政とローマ後期王政（そのⅣ）——セルウィウス・トゥリウスの王政の構造」『国際文化研究』（東北大学国際文化学会）3（1996）、p.71-85。
- 3) 伝承をまとめたものとして、A. Schwegler, *Römische Geschichte im Zeitalter der Könige*, Tübingen 1853, p.703ff.；R. Thomsen, *King Servius Tullius. A Historical Synthesis*, Copenhagen 1980, p. 9ff. 三大史料以外の史料は断片的で内容的に大同小異である。

- 4) M. Cristofani, 'Ricerche sulle pitture della tomba François di Vulci', *D. A.*, 1, 2 (1967), p.186-219 以来、この編年 (p.209) が一般に受け入れられている: F. Coarelli, 'Le pitture della Tomba François a Vulci', *D. A.*, 3, 3 (1983), p.43 ; Thomsen, p.78 ; M. Torelli, *Storia degli Etruschi*, Bari 1990, p.176 ; C. Ampolo, 'La città riformata e l'organizzazione centuriata', in : *Storia di Roma, 1. Roma in Italia*, Torino 1988, p.205 等。
- 5) 『エトルスキ国制の研究』南窓社 1982 (以下『国制』)、p.83f., 94f. : Pareti 説、de Sanctis 説、A. Alföldi, *Early Rome and the Latins*, Leiden 1963の所説に対して; 「紀元前7-5世紀におけるイタリア諸民族間の諸関係の総合的研究」昭和61・62年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書(研究課題番号61510184)、昭和63年, p.6f. : Thomsen 説に対して。
- 6) 拙稿「セントゥリア制の成立について」『教養部紀要』(東北大学) 33 (昭和56), p.194ff. ; Thomsen, p.25f.
- 7) その刊行は前51年の晩春のことだった (F. Cancelli, ed., *Cicerone, Lo Stato*, Firenze 1979, p.9)。
- 8) 拙稿「キケロのローマ王政論」、平田隆一・松本宣郎共編『支配における正義と不正 — ギリシアとローマの場合』南窓社 1994, p.94, 99.
- 9) G. Capdeville, 'Le nom de Servius Tullius', in : *La Rome des premiers siècles*, Firenze 1992, p.62f. : "hors-la-loi"; M. Pallottino, *Origini e storia primitiva di Roma*, Milano 1993, p.255ff. : "guardiano, custode" ; Thomsen, p.64f. : 「奴隷とは無関係」、等。
- 10) R. M. Ogilvie, *A Commentary on Livy 1-5*, Oxford 1965, p.160 は、Valerius Antias による創作とする。
- 11) セルウィウスをラテン系と見る説 — 例えば T. N. Gantz, 'The Tarquin Dynasty', *Historia*, 24 (1975), p.543, 547 ; Coarelli, p.65 — はこの点を見落としている。
- 12) 文献とも前掲拙稿「紀元前7-5世紀におけるイタリア…」, p.5f., 8 参照。
- 13) M. Torelli, 'Dalle aristocrazie gentilizie alla nascita della plebe', in : *Storia di Roma, 1*, p.253f. によれば、それは緩い fides の結び付きで、「sodalis の fides はクリエンテスのそれとは別物と思われる」。
- 14) Hoffmann, 'Tullius (18)', *RE*, VII A 1, 1939 (1974), Sp. 818は、これを伝説ととる。
- 15) Cf. Pallottino, p.287 (「忠誠と信頼の関係」); Thomsen, p.96 ; T. J. Cornell, *The Beginnings of Rome*, London/New York 1995, p.138.
- 16) Plsa という地名は存在せず、例えば Torelli, p.176 は Falerii (?) と解する。
- 17) I. Sgobbo, 'Un episodio storico del periodo etrusco di Roma nella scena di aruspicio dello specchio di Toscana', *Rend. Accad. Arch. di Napoli*, 54 (1979), p.255.
- 18) Thomsen, p.96 ; J. Heurgon, *Rome et la Méditerranée occidentale jusqu' aux guerres puniques*, Paris 1969, p.235, 241, 245, 247; S. Mazzarino, *Dalla monarchia allo stato repubblicano*, Catania (s. d.), p.186, 193. これに対し Pallottino, p.250 ; Gantz, p.550f., 553; A. Momigliano, 'The Origins of Rome', in : *The Cambridge Ancient History*, VII, 2, Cambridge 1989, p.96; Schwegler, p.720 は、否定するか疑念を表明する。

- 19) Ogilvie, p.159; Hoffmann, Sp.807 は、神話的出自を伝承の最古の部分と主張する。
- 20) Fest., 486L における Volcidentes および Maxjarna という補読 (Cf. Sgobbo, p.258f.) は不確かであり (Cf. Thomsen, p.82)、その論拠にはなりえない。
- 21) Thomsen, p.75 ; Cornell, p.143ff. ; Mazzarino, p.166.
- 22) Pallottino, p.229f., 243 ; Torelli, p.114.
- 23) Coarelli, p.62ff. によれば、macstrna はラテン人で、また venthi cal[]plsachs はウェネト人、marce camitlnas はティブル人であった。
- 24) Heurgon, p.245 によれば、彼らは “princes” であった。
- 25) Coarelli, p.64 ; Thomsen, p.97f. ; Heurgon, p.247, 249 ; R. E. A. Palmer, *The Archaic Community of the Romans*, Cambridge 1970, p.117, p.217, n. 218 ; Mazzarino, p.33, 187. これに対し Cornell, p.140 ; A. Bernardi, ‘Dagli ausiliari del Rex ai magistrati della *respublica*’, *Athenaeum*, N. S. 30 (1952), p.27、は懐疑的である。
- 26) W. Schulze, *Zur Geschichte lateinischer Eigennamen*², Berlin/Zürich/Dublin 1966, p.85f. ; H. L. Stoltenberg, *Etruskische Namen für Seinsform und Sachen*, Leverkusen 1959, p.15, 17 ; Alföldi, p.214.
- 27) H. Rix, *Das etruskische Cognomen*, Wiesbaden 1963, p.278ff.
- 28) Pallottino, p.245.
- 29) これを単に技法上の問題に還元する (E. Burck, *Die Erzählungskunst des T. Livius*², Berlin/Zürich 1964, p.161) ことはできない。
- 30) Cornell, p.139 ; M. J. Gagé, ‘De Tarquinies à Vulci’, *MEHFRA*, 74 (1962), p.82, n. 1 ; P. de Francisci, *Primordia civitatis*, Roma 1959, p.640, n. 89, p.717.
- 31) Coarelli, p.49 ; Thomsen, p.90, 112 ; Heurgon, p.241 ; Mazzarino, p.186f., 203.
- 32) Ogilvie, p.162f.
- 33) Pallottino, p.224f. によれば、これは「小説またはおとぎ話的なエピソードの例」である。
- 34) Pallottino, p.225 がこの点を強調する。
- 35) J. Heurgon, *La vie quotidienne chez les Étrusques*, Paris 1963, p.104f., 110f.
- 36) Pallottino, p.203f. ; Ampolo, p.217.
- 37) Alföldi, p.207, 223, 231 はクネウエを王と捉え、Gantz, p.552f. は王ではありえないと見る。
- 38) U. Coli, ‘Regnum’, Firenze 1951, p.28, 45, n. 19 ; Gantz, *ibid.*
- 39) 伝承ではセルウィウスの統治は前587年に始まるが、Pallottino, p.203f., 248 はプリスクスの死とセルウィウスの登極の間に約10年間（前570ころ－560年ころ）を想定する。
- 40) Cf. Cornell, p.139 ; Sgobbo, p.277 ; Momigliano, p.96 : “condottiere”.
- 41) Schachermeyr, ‘Tarquinius’, *RE*, IV A 2, 1932 (1960), Sp. 2739; Hülsen, ‘Caelius mons’, *RE*, II, 1, 1897 (1970), Sp. 1273 ; Thomsen, p.83 等。C. Battisti, *Sostrati e parastrati nell’ Italia preistorica*, Firenze 1959,

p.161：その当否は「考古学が決定する」。

- 42) Thomsen, p.108ff. ; Pallottino, p.231, 256. Schwegler, p.723 によれば「革命の所産」。
- 43) セルウィウスが何故この名前を選んだかについては、Capdeville, p.62f., 66f.
- 44) Francisci, p.643 ; Coli, p.37.
- 45) C. J. Smith, *Early Rome and Latium*, Oxford 1996, p.169ff., 197 ; Pallottino, p.215 ; G. W. Botsford, *The Roman Assemblies from their Origin to the End of the Republic*, New York 1909 (1968), p.153ff.
- 46) Thomsen, p.238ff., 249 ; Francisci, p.643.
- 47) J. -C. Richard, *Les origines de la plèbe romaine*, Paris 1978, p.353, 427. これに対し Cornell, p.148f.
- 48) Cf. Cornell, p.158, 166.

本稿を平成 8 年 5 月に退官された渡辺治雄・東北大学名誉教授に捧げる。